

未来へつなぐ vol.9 | 遠藤 憲五 |

さいたま商工会議所 専門サービス業部会 部会長
税理士法人 遠藤・小田会計 代表社員

遠藤 憲五 (えんどう けんご)

昭和27年、福島県二本松市生まれ。郡山商業高校を卒業後、日本オイルターミナル(株)に就職、在職中に税理士資格を取得する。平成元年に転職し、税理士事務所岡本会計に入社。平成22年に同事務所を第三者承継し、平成30年に税理士法人遠藤・小田会計に改組。令和元年よりさいたま商工会議所・専門サービス業部会長。

日々学び、顧客に寄り添って
有益な情報とサービスを提供

適切な納税は企業の大きな義務であり、同時に経営のバロメーターともなります。「税理士」として地域経済を担う中小企業をサポートしつづけて30年、税務のプロとしての熱い想いを伺いました。

私は福島県の二本松市に生まれました。憲五という名でもわかるとおり、5番目の男子。そして12人兄妹の末っ子という大家族に育ちました。青春時代はもっぱら野球に打ち込み、福島の名門・郡山商業でピッチャーを務めていました。当時、郡山市内の市長杯大会決勝で、中畑清さんがいる高校と対戦したことなど、今でも懐かしく思い出します。

高校卒業時は地方公務員試験を受けたのですが、あえなく不合格。さてどうしようと思っていたら、高校の恩師に「公務員に準じる会社だから」と紹介されたのが、日本オイルターミナル(株)という、国鉄出資の第三セクターでした。よし、これで地元に残れるし、野球も続けよう…などと思っていたのですが、なんと入社したら1か月で本社配属だという。19歳で上京し、いきなり東京・丸の内での勤務。「東京には空がない」という有名な詩は本当なんだなあ、と思ったものでした。

思いがけない経緯で、税理士の道へ そしてさいたまでの事業承継

さて、ここまでの経歴ですと、一体いつ税理士になったのか、と思われてしまいそうですね。実はこの前職時代、後に国鉄副総裁を務めたえらい方が専務になり、意欲ある者にはどんどん勉強させよ、と社内奨学金制度をつくったのです。

当時24歳で経理部資金課にいた私は、先輩の薦めもあり、この制度で夜学の専門学校に通い、税理士を目指すことになりました。30歳までに…とと思っていましたが、実際に受かったのは昭和58年、31歳のとき。合格後も含めて私はここで約18年間勤めました。

ただ、その間に浦和に家を持ち、税理士として開業届けを出して、税理士会の会員となったのです。結局、本業が多忙ですぐ退会してしまいましたが、その際に税理士事務所 岡本会計の岡本正作先生とご縁ができ、平成元年にこちらに転職することを決意しました。

岡本会計で経験を積みさせていただくうち、10歳年上の先生とは多くの経営ビジョンを共有するようになりました。



事務所外観

先生には「60歳で引退し、後任に事業を託す」という夢があり、あと数年と迫った当時の事務所には、先生に次ぐ資格者が私しかいませんでした。そこで、この事務所を引き継がないかという話が持ち上がったのです。元々は岡本先生の父上が開いた事務所、しかも先生自身も脂ののった時期に…と驚いたのですが、代々の顧客を支え続けるためにも、先を見据えて計画的に承継を進めたい、というのが先生のご希望でした。

これを受けて、約3年ほどかけて承継を進め、平成22年に事務所代表となりました。そこからさらに総合力・対応力の高い事務所へと進化すべく、小田税理士を代表社員として迎え、連名の税理士法人へと改組したのが、平成30年のことです。

税務を通じて、顧客にプラスαの付加価値を 野球少年の情熱で、生涯全力投球

税理士は企業の義務である適正納税を遂行し、大切な売上や資産をどのように経営に生かすかをアドバイスする「税と資産のエキスパート」。しかもその業務は、申告・提出の期限を厳守し、毎年のように変わる法律、社会情勢が、顧客にどう影響するのかと、日々学ぶ真摯さが求められます。

試験の難易度も高い上、いずれはAIで代行できるようになるなどという予測もありますが、実際に顧客と向き合ってみないと、経営者が心を開いて相談してくれることはないな、というのが私の実感です。お客様の立場に寄り添い、よい関係を築く。数字の裏側にある事情を慮る。そういった人間でなければできない無形のサポートこそ、税理士が経営者に提供できる付加価値であり、経営者が真に求めていることなのではないでしょうか。

気づけば私も70歳となりました。愛する野球のおかげで健康には自信がありますが、そろそろ次代についても考えるタイミング。さいたまの税理士として30年の感謝を、税理士会や商工会議所の会務への貢献で、還元していきたいと思っています。



関東信越税理士会の野球大会では、埼玉県連の投手兼コーチとして9連覇の偉業を達成